



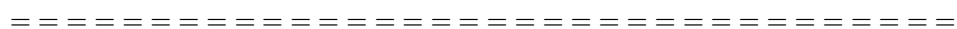
地域日本語支援ニュース こだま 第 352 号

2019.1.10



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる：静岡県磐田市から■

外国人住民と共に考えるまちづくりへの取り組みは、全国各地で行われています。今回は、前号（2018 年 12 月 13 日配信）でご紹介した「避難所運営ゲーム（HUG）」の実施など、年間を通じて様々な工夫した実践を行っている磐田国際交流協会の活動をお伝えします。

.....

「安心・安全なまちづくり」のための取り組み

—地域の日本語教育活動でできること—

一般社団法人 磐田国際交流協会 鈴木ゆみ

◆「協働」の場づくり◆

2018 年、「今年の漢字」に選ばれた文字は「災」でした。磐田市でも台風による停電が何日も続き、日頃の備えについて考えさせられましたが、この時に市から発信された情報の中に、残念ながら外国人に配慮したものは見受けられませんでした。市行政だけでなく地域の自治会等自主防災組織では、まだ十分に外国人対応について考えられていないのが現状です。

一方、外国人は地震や津波が来たらどうしようと不安に感じてはいますが多くの方はこちらから働きかけなければ地域の防災活動に参加するということはありません。磐田市では以前、外国人が集住する地区で外国人を対象にした防災訓練が実施されたこともありますが、当協会がこだわっているのは日本人と

外国人が共に参加する「協働」の場づくりです。

◆本物を体験する◆

当協会が実施している日本語教室では、対話活動を取り入れて、対等な立場でお互いに学び合う相互学習に力を入れています。対話を通じて交流しながら、外国人は日本語を習得し、日本人は外国人とのコミュニケーション力を養います。生活に役立つテーマを取り上げ、できるだけ「本物」を体験できるよう専門家を講師に招いたり、外に出かけて実践活動をしたりもしています。

例えば、年1回実施される地域の水防演習に外国人が参加し、様々な組織や団体の方と直接話す機会を得たり、消防署を訪問した時には、119番通報訓練、AED訓練の他、救急車に乗せてもらったり消防服を着させてもらったりして、ドキドキワクワク感を味わいながら学びました。

◆自治会との連携 「自治会長と話そう！」◆

このような地域の日本語教育活動の一環として、多文化共生や防災をテーマに自治会と連携して「自治会長と話そう！」という取り組みを実施してきました。自治会長から「災害が起こったら何が心配？」と聞かれると「学校に行っている子どものこと」と答えるブラジル人のお母さん。技能実習生に「どこに住んでいるの？」と聞いてみると、意外に、お互い近所であることが分かり、自治会長も急に親子のような親近感を覚えたり、ということも。会って話してみると、日本語が片言でも案外分かり合えるものだと感じてもらえたり、「外国人」と一括りにするのではなく、どこそこ出身のなにになにさん、という存在になったりと、顔の見える関係づくりの一助になったのではないかと思います。

◆「やさしい日本語」を使った避難所運営ゲーム（HUG）の実施◆

机上で行う避難所運営ゲーム HUG を実施したこともありました。災害時にどんなことが起こるか、どう対処するのかを一緒に考え、参加者から「難しかったけど大切なこと」「被災者でも元気な人は、協力し合って避難所を運営することが分かった」「同じ国出身の人の役に立ちたい」「外国の方と一緒に実施することで、迅速な判断と確実な情報の共有化の重要性を再認識した」などの感想が聞かれ、外国人も役割を担って避難所を支える一員であることを学びました。この取り組みが基盤となり、4年前から地域の防災訓練に日本語支援者

が外国人を引率して参加するようになりました。

※やさしい日本語を使った避難所運営ゲーム（HUG）

<http://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/manabu/hinanjyo-hug/index.html>

◆どんどん外へ飛び出そう！◆

これらの活動を通して気づいたことは、外国人が参加して初めて地域の防災活動に多文化対応の芽が生まれるのだということです。実際に目の前に外国人がいるから、看板を多言語標記にする意味が生まれます。情報を掲示する時はイラストを描いたり漢字にひらがなをつけると誰にでも分かりやすいよねと、中学生ボランティアと共有できた時は、お互いに笑顔になりました。

以前は、どうして外国人のことを考えてくれないのだろう、と不満に感じていたこともありましたが、今は、当事者が実際の場に参加してこそ地域が変わっていくのだと考えています。そして、日本語支援者は、地域と外国人を繋ぐとても重要な存在です。

地域の日本語教育活動はどんどん外へ飛び出しましょう！防災に備えるのは特別なことではなく、日頃の在り方が大事です。日頃から地域の人たちとの繋がりを作る活動や取り組みを工夫することが、外国人にとっても日本人にとっても安心・安全なまちづくりになるのではないのでしょうか。

◇磐田国際交流協会

<http://www.iwataice.jp/kyokai>
